2024年9月

日本図書館情報学会
初期キャリア研究者の問題に関する調査　報告書

日本図書館情報学会は，2024年度研究大会で初期キャリア研究者が抱える問題と支援の方向性を考えるシンポジウムを開催します。開催に先立ち，初期キャリア研究者の問題について，学会員や学会員以外の皆様の意見をお伺いすることを目的としたアンケート調査を実施しました。

この報告書は，調査結果の単純集計および自由回答をまとめたものです。

調査概要

題目：初期キャリア研究者の問題に関する調査

実施期間：2024年7月20日～8月30日

実施方法：ウェブフォームによる質問紙調査

調査対象者：日本図書館情報学会の学会員
併せて，以下の本調査でいう「図書館情報学の初期キャリア研究者」（非学会員を含む）
- ・大学院在学者（修士課程，博士前期課程および博士後期課程）
- ・大学院修了後10年以内の方
- ・図書館員（実務者）で図書館情報学を研究している，または研究に興味のある方
- ・出産・育児・介護等で研究活動に困難がある方
- ・図書館情報学の大学院や研究団体のない地域の在住者
- ・上記以外の問題で研究活動の遂行に困難がある方

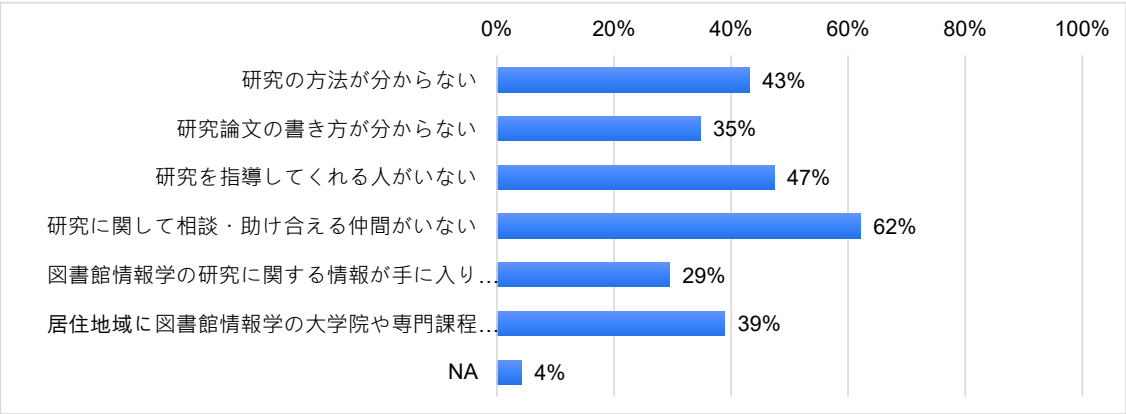
回答数：96件
うち有効回答数：95件(99%)

本件の問い合わせ先
日本図書館情報学会研究委員会
kenkyu@jslis.jp

＜問1＞「研究の方法・内容」について

＜問1－1＞「研究の方法・内容」について，初期キャリア研究者が抱える問題を以下から選択してください（複数回答可）。

研究の方法が分からない	41	43%
研究論文の書き方が分からない	33	35%
研究を指導してくれる人がいない	45	47%
研究に関して相談・助け合える仲間がいない	59	62%
図書館情報学の研究に関する情報が手に入りにくい	28	29%
居住地域に図書館情報学の大学院や専門課程がない	37	39%
NA	4	4%
母数	95	



＜問1－2＞「研究の方法・内容」について，＜問1－1＞以外にどのような問題・ニーズがあると思われますか。ご自由にお書きください。

相談先・交流

学会発表の原稿を見てもらうなどの研究上の問題を、誰に相談したら良いのかわからない。現役の学生ではない自分が元指導教授を頼っていいのか、心理的な不安がある。

・<問1－1>について、研究を指導する人、相談する人はいないというよりは、仮にいたとしても現実には難しいという場合もある（気軽に相談できる時間や場が双方にあるわけではない）

・図書館情報学の研究は主として研究対象（館種など）によって分かれており、一方で研究手法は学として確立しているわけではなく、他分野の手法を取り入れて行われることが多いため、質的・量的とも多様な手法が採られている。自分の研究課題に対して、研究対象と手法の両方がマッチする指導者・相談相手は少ないように思われる。

学会誌の査読コメントが、（著しく）妥当性を欠いている指摘や評価がなされた場合に、それにどのように対処すべきかがわからなかったことがありました。

指導教員に研究について相談するタイミングがわからない。

職場柄、図書館情報学の研究経験を持つ人が少ない

特に実践者出身の研究者の場合研究に充てられる時間が限られており、大学院に進学してもオンラインで教授と一対一という場合が多く、指導は受けられるものの研究者コミュニティに入りにくい傾向があるように思います。コミュニティ構築の場があると助かります。

学会員間で、どのようなテーマで活動しているのかについての情報を得にくい。出身大学（大学院）のコミュニティに入っていなければ、なかなか情報が分からないため、相談しづらい。

研究方法

研究テーマ・トピックの見つけ方がわからない、どの範囲が「研究」なのかがわからない

図書館業務をしていると、図書館学とは異なる分野が絡んでくることが多くあるが、最終的には図書館学として研究するとしても、どのように研究していくべきなのか難しく感じる。

修士論文後の次の一歩に、何から手を付けたら良いか迷っています。
研究者が少なく分野をまたいだ研究を希望しているため、それぞれの分野の視点を入れた研究に難しさを感じています。

そもそも、図書館情報学ってなに？という困惑はあるかと。
情報収集スキルのプロフェッショナルについては今まで教師やモデルイメージがおりませんでした。ついては、今後の学生さんのイメージ、例えばプログラムの基礎基本なのか、マーケティングのコツなのか、YouTubeの再生回数増なのか、何に役立つのか具体的な実践事例を示してほしいというニーズはあるかと存じます。
研究には課題や興味が肝要です。「なんでできないの？」「どうしてやらないの？」という疑問が、研究の気づきにつながるとおもいます。

調査の分析方法など、基礎的な研究方法を学ぶ場が限られている。

図書館情報学における方法論と研究手法に関する海外・国内動向を知りたい。できれば、日本図書館情報学会や三田図書館・情報学会などの関連学会が方法論を巡る議論の方向付けをしたり、ガイドラインを作成したりするなどの試みをしてほしい。

（図書館情報学研究用に）方法論に関してまとめた概説書などのものがあると良い

そもそも日本では図書館情報学分野の大学院が少ないため、情報が得にくい。さらに修士課程の学生（社会人学生は特に）は学術的なバックグラウンドが様々なため、基本的な知識（論文検索、執筆スタイル、学会発表、論文投稿、著作権など）にバラツキがあり、困難を感じる学生もいると感じます。放送大学など一部の通信制大学院では行われていますが、入学前後にアカデミック・ライティングの基礎知識の講義を行うことも有効だと思います。

共同研究

同じ研究を行う人、共同研究を行える人がいない。もしくは非常に少ない

・図書館情報学の教員は、各大学に1人～2人しかいないため、どうしても大学を跨って共同研究研究する形が多くなる。しかし、研究倫理審査の基準や申請の要否が大学によって大きく違いすぎて、大学をこえた共同研究を行いづらいケースが何度もあった。（これは若手に限った話ではないと思うが、若手教員が年上の先生と共同研究する場合、なかなか「自分の大学だけは倫理審査が厳しくて…」と言い出しづらい。）
・研究成果のアウトプットに対する考え方が、共同研究者と一致しないことがある。初期キャリア研究者にとっては、テニュア獲得や昇任のために、査読付き論文の業績を出すことが何より重要だが、共同研究者がそれを望まない場合もある。特に、現場の方との共同研究などでは、時間や労力がかかる査読付き論文よりも、速報性の高い査読無し発表を好まれてしまう場合もあり、合意形成の難しさを感じている。他学会のように、現場の方でも投稿しやすい「実践研究論文」のような査読付きの枠があると、合意を得やすいと予想する。

・研究に割ける時間・エフォートが限られている。そのため共同研究への参画が難しい。

他の研究者と関わる機会がないので、単著での研究しかできない

研究協力者や研究の単純作業部分を担うアルバイト等を得にくいため、一定以上の規模の調査等が行えない。1人でできる範囲の研究に止まりがち。

実務者が共同研究に加わることを、勤務先があまりよく思わない。許可や根回しが求められる。

大学院

十分なサポートを受けられる大学院とそうでないところの差が大きいように思います

現在は、大学院に所属しているため、あまり問題を感じていない。卒業後の就職や研究の続け方について、考えていく必要があると感じている。

社会人大学院への通学は、「職場に迷惑をかける」という前提を認識していることを態度で示し、周囲に頭を下げ続けないと困難である。学び直しの場である図書館だが、学び直しをする職員は歓迎されない状況があることが問題。

研究以外の通常授業において、課題をこなすに当たって相当負荷の高い課題が出され、研究の方法・内容に時間を費やす時間が無くなるほど、通常授業の課題に割く時間がかなり大きかったこと。

研究環境

働きながら研究ができるプラットホーム

非常勤講師のみの立場になると、使用できる有料データベース（特に海外文献）が限られていること、何より倫理申請をほぼ行えないことに困難を感じます。

研究したいものの無所属（無職）の場合の研究環境が無い。また、修士課程修了者であっても再就職が難しい（年齢の都合が大きい）。そのため研究者としての活動が正直できない（支援もなければ、助成金等も受けられない）。

その他

科目教育準備に時間を要し、研究に要する時間を確保できない。

研究とは別に本務を抱える場合、充分な研究時間の確保が困難

初期キャリア研究者向けの発表の場がほしい

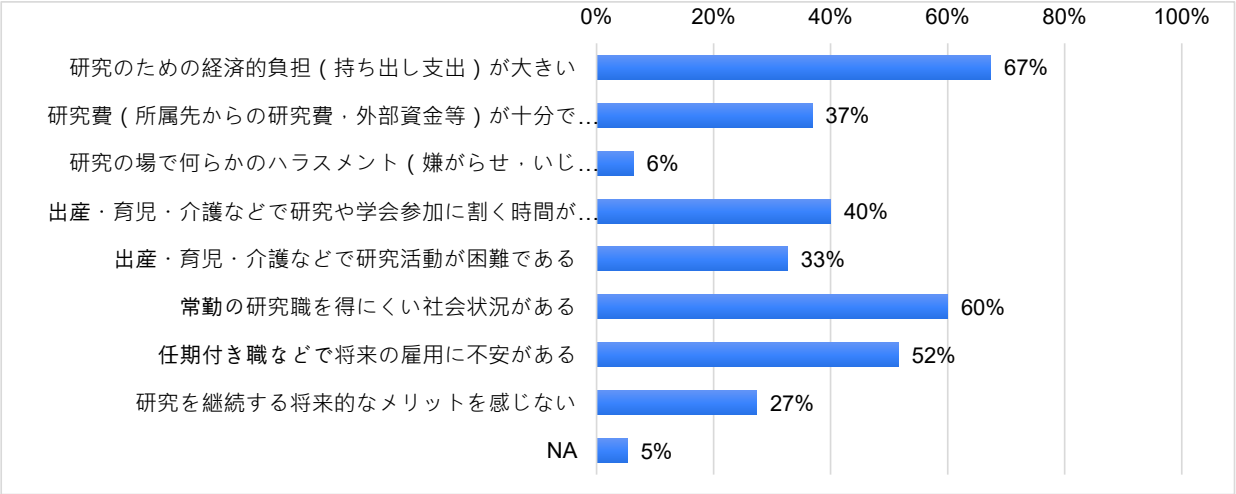
経済的援助（2件）

特になし

＜問2＞「研究の環境」について

＜問2－1＞「研究の環境」について，初期キャリア研究者が抱える問題を以下から選択してください（複数回答可）。

研究のための経済的負担（持ち出し支出）が大きい	64	67%
研究費（所属先からの研究費，外部資金等）が十分でない	35	37%
研究の場で何らかのハラスメント（嫌がらせ，いじめ）を受ける	6	6%
出産・育児・介護などで研究や学会参加に割く時間がない	38	40%
出産・育児・介護などで研究活動が困難である	31	33%
常勤の研究職を得にくい社会状況がある	57	60%
任期付き職などで将来の雇用に不安がある	49	52%
研究を継続する将来的なメリットを感じない	26	27%
NA	5	5%
母数	95	



＜問2－2＞「研究の環境」について，＜問2－1＞以外にどのような問題・ニーズがあると思われますか。ご自由にお書きください。

家庭との両立

・図書館情報学関連の学会は、多くが土曜・日曜に大会を開催するので、子をもつ人間には現地参加のハードルが高い。今まで、図書館情報学関連で託児サービスがある学会は少なかったので、家族や親族に子供を預けて出張せざるを得ず、毎回申し訳なさを感じながら学会参加している。（なので、今回ついに託児サービスが開始されたのは、とても素晴らしいと思う。）

育児に関する家庭内での環境整備が限られている場合は行動可能範囲・時間が限られており、共同研究への参加、学会参加に難しさを感じます。
近年の各学会のハイブリッド開催は有り難いです。

・図書館情報学関連の分野は学会が細分化しているので、年に何度も土日出張することになり、家族に多大な負担をかけてしまっている。しかし、学際的な分野を研究する以上、どうしても複数の学会に所属しないと範囲をカバーできず、絞り込むことができずにいる。研究と育児の両立法として、果たしてこれは正しい在り方なのか、いつも悩み続けている。

育児中且つ非常勤講師の場合、学童や保育園認定の際に課題を感じます。研究者の場合、調査研究や論文・著書の執筆、査読や研究会主催等が非常に重要かと思いますが、これらの研究業務に就労証明書は発生しないため、研究業務以外に月64時間以上の業務が必要となります。
加えて非常勤講師の場合、就労証明書に記載される就労時間は授業時間のみであるため、ここにも困難が生じます。証明書の備考欄に「授業時間以外にも諸業務あり」等記載してもらっていますが、具体的な業務時間の証明は出来ないため、結果として多くの授業を持つことになります。
本当はもう少し研究業務への時間を持ちたいのですが、学童や保育園が使えなくなるとより困るため、痛し痒しです。

家庭、仕事と両立しながら研究を進めていく方法がわからない。

日々の仕事、家庭生活があり、研究の時間が取れない

実務者の研究

シフト勤務のため、図書館員（実務者）として働きながら大学院で学ぶことに時間的な困難がある

フルタイムの実務のために研究の時間が十分とれない

現職の図書館員が社会人大学院生として活動すること自体のハードルが上がっているように感じます。非正規職員の場合は給与が低く、学業や研究にお金を回すことが困難と考えられます。また、正規雇用の場合でも図書館以外の部署へ配置換えされた場合は、研究活動のモチベーションの維持が難しいと思います。近年は、入職時に図書館の専門職で採用された方でも、親組織（自治体や大学など）の情勢の変化などによって別の部門へ異動するケースも増えており、長期的なキャリアで学業や研究を展望することが困難になってきています。そのほか、職場や親組織の理解が得られないという場合もあります。

仕事や生活の時間から、研究の時間を捻出することが困難である。

研究分野とは直接関係のない仕事をしているが、そのための両立

私は社会人大学院生なのですが、「出産・育児・介護など」ではありませんが、学会参加（公共図書館勤務のため土日も仕事）や研究活動に参加しにくい環境です。

自身の周囲の大学図書館は派遣形態などの全委託が多くなり、自身のスキルと給与のバランスが合わないと分っており諦めている。図書館情報学の研究者としてのメリットがかなり低いことから、仕事をするにしても別業種を探すことになる。非常勤講師としても、周辺大学に司書課程を持っている大学も少ないことからやはり身動きが取れない。

実務家の場合，本務先の理解を得にくいというケースもあると考えます

社会人学生の場合、仕事と研究の両立、ペース配分、職場の理解、学費の確保が課題だと思います。

常勤の司書職では、所属館によって研究への理解・ニーズが異なる。また、繁忙度も異なり、通常業務との両立が困難な場合がある（個人的な経験から得た印象では、大学図書館では比較的理解・ニーズ・時間的余力があり、公共図書館ではその逆？（特に市民対応にエネルギーを必要とする））。

職場の上司、同僚の理解、協力（サポート）を得にくい

図書館で働きながら研究をしていることに対する、職場での風当たりのつよさと、仕事と両立する時間がないこと
具体的には、学会の運営の手伝いなどでも休暇を取得せねばならないため。

図書館現場に勤務していると、業務と直接関連するテーマ以外の研究活動は自身の余暇時間を使わなければならず、仕事と研究の両立が難しい

正職員でないので、職場にメール設定がない。

選択肢は出産、育児、介護などですが、仕事をしながら通う院生は、仕事との両立のハードルが大きいため、「など」に含まず別項目にした方が、負荷の正確な数値が出るのではないかと思います。

大学図書館員としての勤務の中で、いかに実際の勤務とバランスを時視しながら研究を行うことが出来るかが、現状の個人的な問題となっております。

大学等の研究機関以外の所属だと、まずは所属先の理解を得ることが最初の関門となる。そして研究にかかわる費用、協力機関を得ることために、大学の先生方の協力を得て、そこからスタートすることになる。通常業務のほか、家事育児ももちろんあるので、ここでまごついてなかなかスタートできない現状がある。

将来の見通し

育児等の理由から居住地域を移すことが困難だが、居住付近に研究実績を生かせる組織が無く、職を得られる見通しが無い。

何よりも、研究が継続できる環境として安定的な雇用や収入の問題が大きい。特に子育て世代なので、良さそうな職があっても、任期付きの職であったり、あまりに給料が安く、将来的に子どもを養っていく責任感等の不安があり、踏み出せない。（ここが海外の大学との大きな違いではないでしょうか）

研究を積み上げ、どのようなキャリアパスがデザインできるのかが不明確である。

社会情勢としての専任の定年延長が新規採用枠を狭めている

専任の職を得る機会が減っている。図書館情報学分野の大学院が少なすぎ、東京近辺に偏っている。

日本のアカデミアが抱えるポストや給料の問題そのものが課題と言えますが、ニッチ分野である図書館情報学ではこの課題がより顕著に現れる気がしています

研究費・経済的負担

・とにかく個人研究費が少なすぎて、外部資金を獲得しないと研究が成立せず、毎年多数の外部資金の申請書を書くことに追われ続けている。

研究にかかる経済・時間の負担を減らす方法や先の見通しの情報があれば、家族の理解もますます得られ頑張れそうな気がします。

研究を続けることと、経済的な面での充実がリンクしていない

社会的な不寛容を除いて、当事者の財務的な知識と倫理が不足している現状も問題の一端かと思います。
研究費の大元がどんな家庭のどんな状況から支出されてた資金か。
認識しているうえで、研究をする覚悟と工夫があるかどうか。
基礎研究はひとつの文化にとってとても大事です。
問題は、上記のうえで、研究を進める覚悟を持てますか、という自戒の有無ではないでしょうか。

文献アクセス等

・所属が研究機関でないと、研究に利用できる研究室などの環境がない。またWoSやScopusといった有料DBの利用も難しい
・ジャーナル・論文の入手が困難（あるいはPPVしかなく、費用面の負担が大きい）

今は恵まれた環境で勉強が出来ているが、卒業するとまず図書館利用や論文の閲覧などに不安を感じている。

図書館情報学分野の特に英語の論文が入手しにくい。（所属機関図書館で雑誌購入やデータベース契約をしておらず、複写取り寄せやILLを行う必要がある。またそのための費用が必要となる）

大学に在学していないので、学術情報資源にアクセスすることが困難

大学等に所属していないと文献へのアクセスが制限されること

直接アクセスできる研究資料（論文など）が少ない。所属先図書館を通して、他大学からの複写取り寄せやILLは可能であるが、手間がかかり、また費用もかかるため、気軽にはできない。

その他

常勤教員のポストについても、校務や授業の負担が大きく、研究に割く時間がない。また、研究業績よりも学内での貢献度を評価される傾向がある。

事務的業務が多く、研究に充てられる時間がほとんどない

論文を集中して書ける場所が少ない

非会員でも気軽に学会に参加できるよう、学会参加費はなるべく低額であることが望ましい。

学会等からの研究支援のための情報提供が少ない

リタイヤ（60歳退職）後の大学院、研究職従事で、体力・知力の衰えを時として感じる。

特になし

＜問3＞学会による初期キャリア研究者のサポート

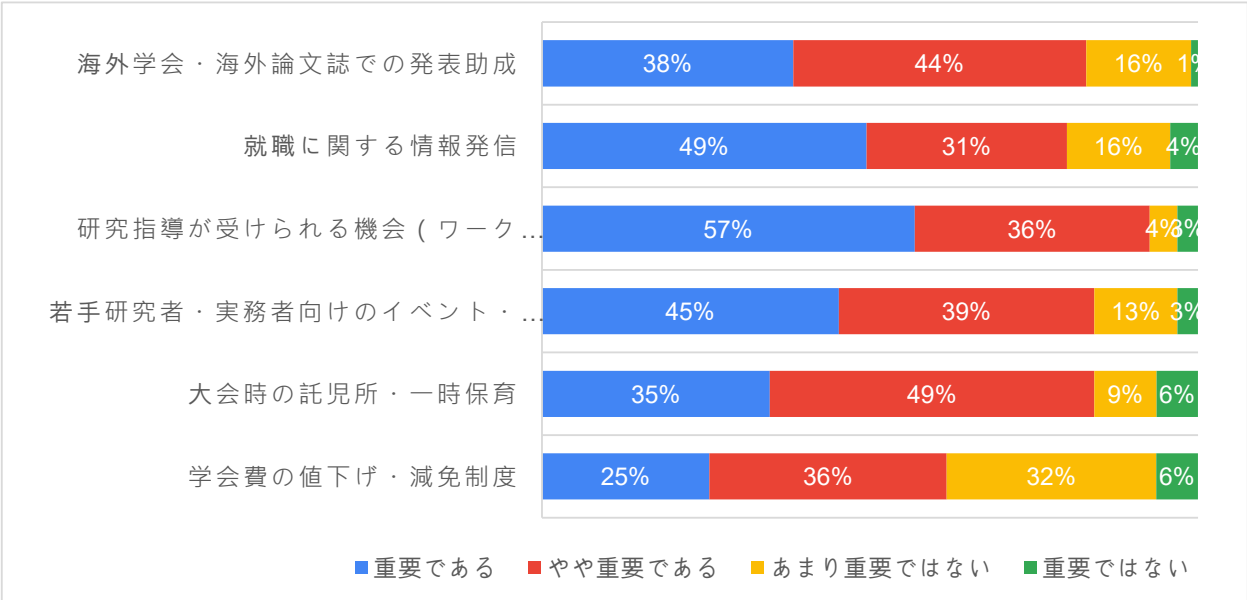
＜問3ー1＞あなたは，日本図書館情報学会が初期キャリア研究者に対してどのようなサポートをすることが重要であると思われますか。それぞれの項目について最も当てはまるものを1つ選んでください。

回答数

	重要である	やや重要である	あまり重要ではない	重要ではない	母数
学会費の値下げ・減免制度	24	34	30	6	95
大会時の託児所・一時保育	33	47	9	6	
若手研究者・実務者向けのイベント・交流会	43	37	12	3	
研究指導が受けられる機会(ワークショップ等)	54	34	4	3	
就職に関する情報発信	47	29	15	4	
海外学会・海外論文誌での発表助成	36	42	15	1	

割合

	重要である	やや重要である	あまり重要ではない	重要ではない
学会費の値下げ・減免制度	25%	36%	32%	6%
大会時の託児所・一時保育	35%	49%	9%	6%
若手研究者・実務者向けのイベント・交流会	45%	39%	13%	3%
研究指導が受けられる機会(ワークショップ等)	57%	36%	4%	3%
就職に関する情報発信	49%	31%	16%	4%
海外学会・海外論文誌での発表助成	38%	44%	16%	1%



＜問3－2＞初期キャリア研究者に対するサポートについて，＜問3－1＞以外にどのような方策があると思われますか。ご自由にお書きください。

オンライン開催

学会のオンライン参加（育児・介護中だと遠距離・長期出張が困難なため）

研究大会へのオンライン参加：他県開催で宿泊を伴う場合、育児の関係上どうしても難しい場面があるため

各種プログラムのオンデマンド配信（いつでもどこでも視聴可能）

学会のハイブリッド（対面、オンライン）開催。育児、介護等で開催場所まで足を運べない学会発表者も、オンラインで発表できるといいと思います。

今もしていただいていますが、zoomによる参加やアーカイブ配信をしていただけると、経済的にも時間的にも大変助かります。が、事務局の方には御負担をおかけすることになるのでしょうか…。

地方在住で研究機関に属さないものには、学会がリアルタイムで対面のみなのは参加が難しい。（託児所などがあっても、連れていく大変さは変わりない）一方で、オンラインも併用してくださるのはありがたいが、その時間が確保できるわけではないことも多い。シンポジウム等は記録があるのでとてもありがたい。

交流・コミュニティづくり

オンラインによる研究者コミュニティ活動の支援。現状では研究者の個人的な人間関係への依存度が高く、つながりに乏しい研究者が孤立しがちと感じる

異なる領域や研究手法を専門とする研究者との橋渡し

同じ環境にある初期キャリア研究者が支え合い励まし会えるような、会合の開催。

研究を始めたいと思っても踏み出せない人たちと、今はじめている人たちがざっくばらんに語り合う場などがあると良いと思います。

研究会等のオンライン実施

所属大学の垣根を越えた情報交換プラットフォームがあると助かります。

情報交換の場やコミュニティづくりへの支援（オンライン）

情報交換や共同研究の場が欲しい。

情報提供・発信

キャリアデザインに関する情報提供

各種助成金や奨学金の情報、海外の学会・大学や研究者との連携（紹介）や共同研究、留学に関する情報提供があると良いと思います。

学会誌に学術論文以外の記事（交流の促進を目的にしたもの）を掲載する。研究室・学部紹介、海外留学や就活体験談、地域間交流、海外からの寄稿など

研究助成を受けるための申請書の書き方講座；就職面接の受け方指導；研究指導のためのメンター制度（研究助成の追加特典として、身近に指導者がいないなど何らかの条件は必要）

初期キャリア研究者のために、『図書館情報学研究ハンドブック（仮題）』を学会として編集・刊行することを提案いたします。1986年に勁草書房から、『図書館・情報学のための調査研究法』から刊行されました。私の知る限り、このような類書は近年、刊行されていないと記憶しております。1986年に刊行された上記の図書は、文献研究（歴史研究など）の手法、科研費調書の効果的な書き方などに全く言及していないのが欠点です。最近、私自身様々な学会の査読者（レフェリー）を経験し、研究のイロハを全く理解していない研究者の論文を数回査読いたしました。大学院生ならば、指導教員の指導に問題があります。そうでない場合、論文を投稿した本人の研究力量に重大な問題があります。『図書館情報学研究ハンドブック（仮題）』の刊行だけによって、初期キャリア研究者全体の研究力量の底上げができるとは到底思えませんが、刊行する価値はあると思います。我流で研究者として一人前になるには、相当の努力が必要です。

長澤雅男，戸田慎一編『図書館学研究入門：意義と方法』（補訂版，日本図書館協会，1993）や，緑川信之ほか『図書館・情報学のための調査研究法』（勁草書房，1986）のような研究の手引で，新しいものがあれば，大学院生が方法を学んだり，教員が教えたりするときに役立つのではないかと思います。

図書館で働きながら大学院に通学する職員がいる職場を顕在化する取り組み
具体的には、地域や図書館ごとに、どれくらいの社会人院生がいるのかを数値で把握し統計データとして継続的に公表し続ける

参加しやすさ

研究費が十分にない現場の図書館員が学会に参加しやすい方策を取ってほしい。例えば，研究集会発表のための交通費等一部補助を学生会員に限定せず，実務者にも広げるなど。

・初期キャリア研究者にとって、学生を学会に引率することも重要な仕事である。しかし、日本図書館情報学会の研究大会は、学生の参加が少ない学会のように見える。学生が発表しやすい（もしくは聴講だけでも気軽に参加しやすい）学会の雰囲気になると、指導教員としても引率しやすくなり、ありがたい。

その他

学会独自の倫理審査：非常勤講師の場合調査に対して倫理申請を行うことが難しいため（参考：日本看護管理学会 https://janap.jp/ethics-review/）

各地の大学に開設されている司書課程等においては、図書館情報学の大学院を経ずに、図書館等の実務経験や隣接領域の学位・研究業績などをもって、常勤・非常勤のポストに就き、司書課程の科目を担当されている方もいる。こうした先生方にも学会に加わってもらい、問3ー1の各項で挙げられているような方法を通じて、図書館情報学の研究により積極的に参画し、着実にこの分野での業績を出していけるよう支援していくことも、有効であるように感じられた。

外部の研究会に参加する交通費などの支援

・海外論文誌の発表助成だけでなく、国内出版社から本を出す際の「出版助成」も行うと良いのではないか。初期キャリア研究者が業績を上げる一助にもなるうえ、国内の図書館情報学関連の出版物の増加にもつながり、分野の社会的認知度を高められる。

初期キャリア研究者向けの発表の場を、一般のシリーズと分けてしまうと業績として微妙になりませんか？　日本図書館情報学会誌本誌に論文として載せるための支援等はできないでしょうか。

図書館情報学の専門知識がどのような分野で活路が広げられるかを身内だけでなく、もう少し周囲（大学全体に対し）へ専門性の発信や理解を得られる環境作りが必要ではないか。

学会全体で、初期キャリア研究者を育てる雰囲気

初期キャリア研究者に負担となる仕事をなるべく回さないこと。大枠でとらえず個々の研究者の置かれた状況に配慮し、それにあった対応をとる方策を検討すること。

より賃金の高い職場の確保

＜問4＞本調査やシンポジウムについての自由意見

シンポジウム

大変重要なテーマであり、日本図書館情報学会でこのようなシンポジウムが開催されることを、とても感慨深く思います。図書館情報学は、多様なキャリアパスで研究者になる人が混在する分野ですので、「初期キャリア研究者」という括り方も画期的と感じました。ただ、実際の困難感や必要とする支援は、出産/育児・介護・現職者などの属性によって、大きく異なると思います。なかなか一括して議論を深めることは難しいと思いますので、今後より粒度を細かくした議論が促進されることを、期待しています。

シンポジウムの開催は、図書館員にも広くPRしてください。

学問分野の発展

地域格差が大きく、図書館情報学分野全体が衰退しているのを感じるので、初期キャリア研究者は育ちにくいと感じる。

図書館情報学において、初期キャリア研究者の就職先とは、私立大学の司書課程担当の教員ポストである場合が多いと思います。しかし全国の大学で、司書課程の廃止や司書課程担当教員の削減が、生じているように感じます。司書資格の制度をいかに発展させ、そして全国の大学の司書課程教員ポストをいかに維持するか、ということは、未来の初期キャリア研究者への支援として重要な話題のはずです。「就職に関する情報発信」のような受動的なことだけでなく、就職先となるポストを持続させる（＝学問領域の規模を維持していく）ための能動的な戦略を、学会としても真正面から考えていく必要があるのではないでしょうか。

優秀な若手研究者を学会として育成する事業に本気で取り組まないと、我々（学会）の将来は暗澹たるものになると感じております。最近、ある大学の教員と話す機会がありました。図書館情報学以外の学問分野の大学教員です。「図書館情報学分野の教員公募をしても、大学教員としてふさわしい若手研究者が応募してくれるかどうか、非常に心配である」。そのように仰っておりました。すなわち、我々の学問分野は、他の人文社会科学分野と比較した場合、教授会における厳しい業績審査（専任教員の採用人事）に通る人がきわめて少ない。他の学問分野の研究者から、図書館情報学はそのように見られているということです。これは、ベテランの図書館情報学研究者にとっては常識といえるでしょう。まず、博士の学位取得者を増やすことが重要です。しかし、現状では図書館情報学で博士の学位を取得できるのは、首都圏の大学にあまりにも偏っています。

実務者の問題

自分のケースでは、公立図書館では人事異動において、修士・博士取得は評価されないことを実感しました。司書職設定の無い公立図書館では、修士を取得したことをかなりアピールしても図書館復帰までに長期間（15年）掛かりました。地方自治体では図書館の地位がかなり低く、普通レベル又はそれ以上に仕事ができる職員は「図書館には勿体無い」と言われ、研究の成果を反映する機会を失われがちです。

社会が修士号・博士号所持者を適切に処遇していないと感じる。図書館情報学分野は学位所持者のキャリア形成を支援するだけでなく、日本社会全体に対してモデルケースを発信することになることを望む

図書館現場で働く者が記録を論文と呼べる形にしたい、または自身の働く図書館の現状を捉えたい、という方は少なくないかと存じます。そのような方々が（初期キャリア含む）研究者とマッチングできる機会をつくれば、皆の相互利益に繋がるのではないでしょうか

現場の図書館員における学術研究への関心がどれくらいあるかについて、興味があります。

その他

入会には原則会員の紹介が必要など、入会へのハードルが高いと思う。紹介者がいない場合の方法も提示されているが、個人的にはそちらも高いハードルに感じる。

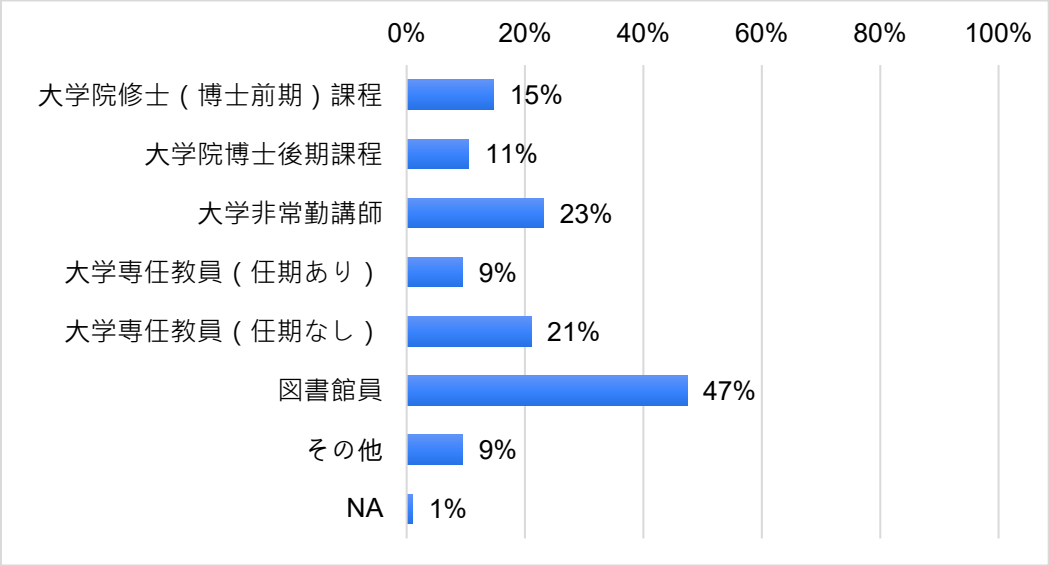
日本の司書制度の歴史的研究

特にありません（2件）

回答者の属性

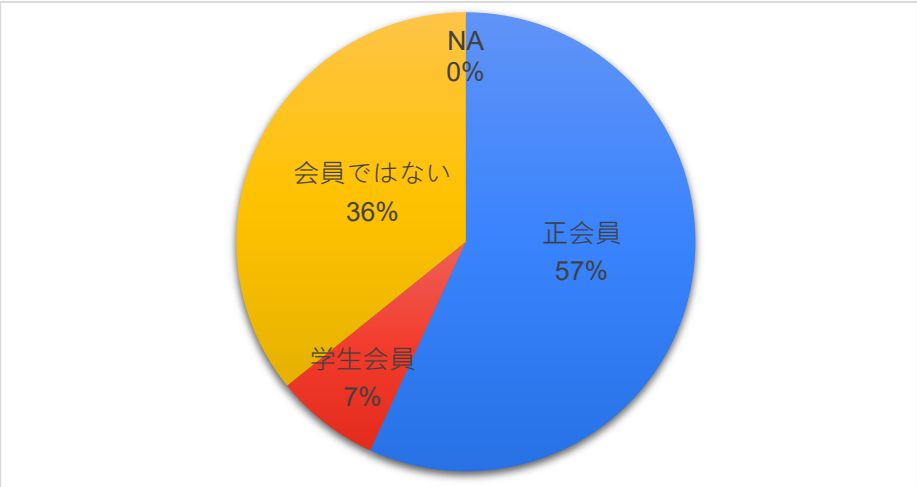
＜問5＞ あなたの図書館情報学にかかわる所属や職種を以下から選択してください（複数回答可）。

大学院修士（博士前期）課程	14	15%
大学院博士後期課程	10	11%
大学非常勤講師	22	23%
大学専任教員（任期あり）	9	9%
大学専任教員（任期なし）	20	21%
図書館員	45	47%
その他	9	9%
NA	1	1%
母数	95	



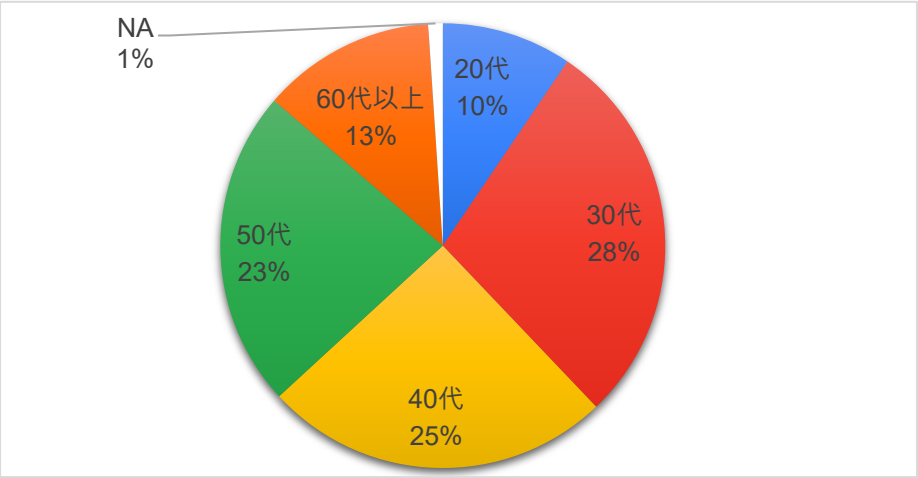
＜問6＞あなたは日本図書館情報学会の会員ですか。

正会員	54	57%
学生会員	7	7%
会員ではない	34	36%
NA	0	0%
母数	95	



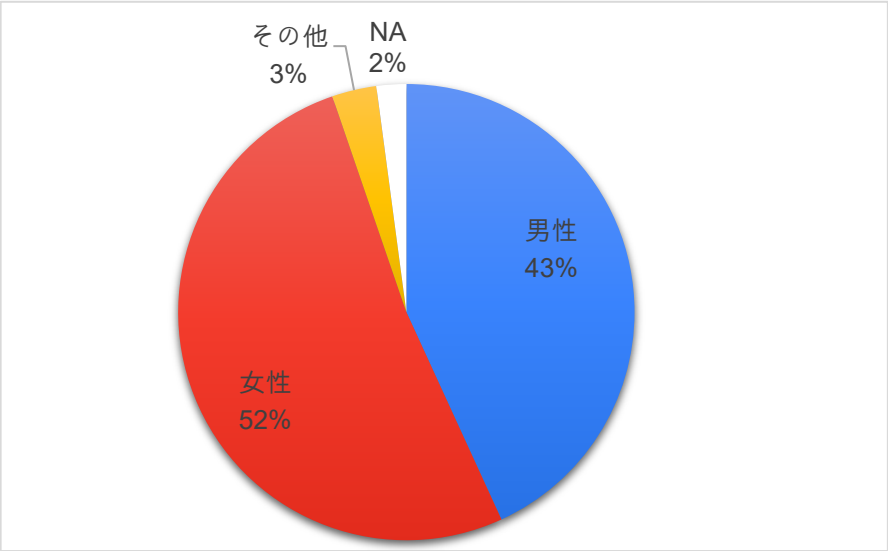
＜問7＞あなたの年代を選択してください（2024年7月1時点）。

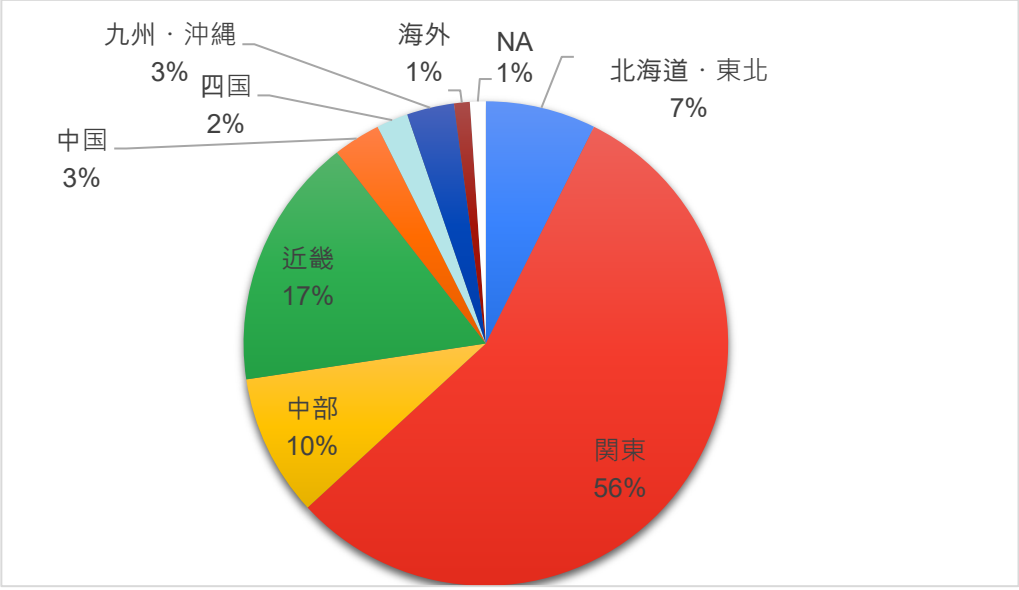
20代	9	9%
30代	27	28%
40代	24	25%
50代	22	23%
60代以上	12	13%
NA	1	1%
母数	95	



＜問8＞あなたの性別を選択してください。

男性	41	43%
女性	49	52%
その他	3	3%
NA	2	2%
母数	95	



＜問9＞あなたのお住まいの地域を選択してください。

北海道･東北	7	7%
関東	53	56%
中部	9	9%
近畿	16	17%
中国	3	3%
四国	2	2%
九州･沖縄	3	3%
海外	1	1%
NA	1	1%
母数	95